

成果の説明書

(氏名) 黒崎 龍悟	(学部) 経済学部
1 重要事項 <研究> ① 科学研究費補助金(「その他の事項参照」)をもとに東アフリカ、タンザニアの農村を事例に、草の根の自然エネルギー利用、農民発のイノベーションの普及の実態についての調査を続けている。自然エネルギー利用の実態や社会における意義についてアフリカの事例、日本の事例を比較しつつ研究を進めてきた。それに関連する成果は以下のとおりである。 - 出版物 - 岡村鉄兵・黒崎龍悟(2021)「タンザニア未電化地域における小規模な太陽光発電の利用実態と不適正利用による問題」『アフリカレポート』59(0), 110-121。 - Mahonge C. P, Nsenga J. V., Itani, J. and Kurosaki, R. (2021). Resource Governance Using A Hybrid Institution in Momba District Tanzania: A Process Approach. <i>International Journal of Social Sciences and Humanity Studies</i>, 13 (1), 152-175. doi:10.34109/ijsshs.202114007 ② 群馬県東南部(邑楽郡周辺)において熱帯作物のキャッサバが生産されていることに着目し、ここ3年ほど調査をしてきた。その内容をまとめたのが以下に示す成果となった。 - 報告 - 原将也・中澤芽衣・黒崎龍悟「群馬県におけるキャッサバ栽培の試みー冬季の苗木管理に着目して」『第31回日本熱帯生態学会大会』(2021年6月25日-27日) - 出版物 - 黒崎龍悟・原 将也・中澤芽衣・佐藤孝宏(2021)「群馬県東南部におけるキャッサバ生産ー農事組合法人アグリファームによる取り組みー」『産業研究』57(1): 15-30. ③ 学内の地域科学研究所プロジェクト「日本における「持続可能な地域」実現の展望と課題ーガバナンスと域内経済循環の観点を中心にー」に参加し、現代における適正技術の意義をテーマとして研究に着手した。昨年度は研究会に参加するとともに関連書籍・論文の収集を進めた。 <教育> 担当する講義の1つが大規模人数となり、ハイブリッド方式の導入でワーク形式を十分に取り入れることができず消化不良となった。今後、同様の状況になった際の対策が課題として残った。ゼミにおいては、海外フィールドワークを実施できない状況を鑑みて、国内フィールドワーク等に重点を置いた。邑楽郡におけるキャッサバ栽培の収穫現場の訪問や、鹿児島県・屋久島において自然保護・生物多様性などについて学ぶフィールドワーク、卒業論文作成のための合宿を学生とともに企画・実施した。また、卒業論文(9名)を指導した。 <社会貢献> 以下の3つの事業をとおして、市民への研究成果の発信をおこなった。 - 教員免許状更新講習として、「国際社会と日本：アフリカの「食糧問題」をめぐる	

問題」(8月18日)を担当した。

- 地域科学研究所公開講座において「アフリカ農村におけるマイクロファイナンスの現在—社会・文化的側面からの検証—」(11月10日)を担当した。
- ラジオ高崎の「ラジオゼミナール」における話題提供(8月13日・8月20日)。

2 その他の事項

- 学内業務：国際交流委員、地域科学研究所・総務企画委員長を担当した。
- 外部資金獲得状況・共同研究など
 - 科研費・若手(B)(代表)「農民グループ・ネットワークをとおしたイノベーション普及に関する実証的研究」、
 - 科研費・基盤(B)(分担)「東アフリカの再エネ開発をめぐる社会的合意形成と土地利用再編の解明」、
 - 科研費・基盤(B)(分担)「タンザニア農村における電化のインパクトと再生可能エネルギー導入に関する学際的研究」
 - 高崎経済大学・地域科学研究所研究プロジェクト(分担)「日本における「持続可能な地域」実現の展望と課題—ガバナンスと域内経済循環の観点を中心に—」

3 次年度以降の計画・抱負

海外調査の再開を見据えて、関連する研究の準備を進める。国内での調査回数や対象地域を増やすこと、また特に国内の事例については歴史資料の発掘・活用に力を入れてアフリカ・日本の比較研究の充実を図る。講義に関しては、とくに概念説明など、受講者にとってわかりづらい部分を洗い出し、より理解を深めてもらえるように資料の工夫をする。